

## 神戸産ベニボタル 三種について

(兵庫県甲虫相資料. 146)

高橋 寿郎

ムネアカテングベニボタル *Konoplatycis otome* (Kôno, 1932) が春先に多いことを本誌 Vol. 11, No. 2 で報告させて頂いたが、1984年も3月22日舞子に出掛けた。快晴ではあったが本年はことのほか寒い冬であり当日の気温も低かった関係から全く姿を見ることが出来なかった。

1ヶ月程たった4月14日烏原貯水池畔の遊歩道を散策していた所丁度20メートル程の距離、鉄柱を立て、木片による土留めをしてある所があった。板を横に積み重ねたような格好で板の最下部に当る所は落葉が可成りつもっている状態であった。この落葉から少々上の位置の板に本種がとまっていた。14日には2♂, 2♀, 15日5♂, 3♀と採集出来た。16日は生憎と雨で行くことが出来ず17日は今にも雨が降りそうな天候であったが1♂を採集した。但しこの日は午後快晴になり気温がグングンあがって神戸で午後3時22.6度と5月中旬の気温になった。

18日も朝はいまにも降り出しそうな様子であったが気温の方は可成り高かった。気温が高かった関係からか数も多く見られた。割合動作も活潑に見えし、飛翔しているのも見られた。18日は10♂, 9♀が採集出来2組の交尾状態のものが見られた。交尾状態のものは15日にも見ている。19日は低気圧の通過で可成りの雨があったので山に行くことは出来なかった。20日は曇りになったが気温は割合低く寒いような状態であった。1♀を採集。21日も気温が低く曇り空でとうとう1匹も見ることが出来なかった。22日も曇り空で気温は21日よりやや高いかなと思われ程度であった。落葉の上にいる1♂を採集。23日は快晴となったが気温が余り上らず遂に見られなかった。24日も全然見なかったが25日には1♀採集。26日は割合気温があがって来て土留めの今迄いた所でない反対の端近くで落葉がやゝある所で2♂, 2♀を採集。1組は交尾状態で運動は割合活潑であった。27日気温は高いが遂に見ることが出来なかった。

本種は今迄この烏原周辺での採集経験は無かったがこの様に多くいるのはタイミングよく出会わなかったからであろう。今一箇所土留めがあるが落葉が無く一匹も見ることが出来なかった。

大体成虫は2週間位見ることが出来、その間に交尾して産卵をするのではないかと思われる。落葉は可成りつもっているのけて地面まで探して見たが良くわからなかった。

動作は全般に大変スローで気温の高い日に飛翔しているのを見たが活潑とは云い難い。成虫で越冬しているのかどうか今一つ良くわからない。河野広道博士が種名に“otome”と名付けられたのは勿論“乙女”のことと思われる。実に美しいベニボタルで“花羞じらう乙女”の表現はピッタリと思われる。

それから1ヶ月程が経過した。6月5日になって上記と同じ場所に行く機会があったが、こんど

は全く同じ場所にてミスジヒシベニボタル *Benibotarus spinicoxis* (Kiesenwetter, 1874) 2♂, 2♀を採集した。その後用事とか雨が降ったりして調べに行くことが出来なかったが11日には1♂, 2♀, 12日4♂, 2♀(1組は交尾中。1♂は上翅がほとんど表面からは両肩部に残っているのが見られ、その先端は腹部の方につまみ込んだようになった奇型だった)。14日には2♂と採集出来この種がこの時期ムネアカテングベニボタルと全く同じ様な出現の状況を呈していた。たゞ色彩がムネアカテングベニボタルに比し渋味なやゝ黒味がかかった赤色であるから印象としては強烈ではない。ところが6月14日にはミスジヒシベニボタルに混じてネアカヒシベニボタル *Dictyoptera speciosa* Ohbayashi, 1954が1♂, 3♀いた。こちらは飛翔して元気がよいようであり♂は翅端が奇型で短縮したものであった。この場所は道路沿の場所であるが陽が直接照り込むことは少く風通しの良い場所で(貯水池に近く適当の湿度がある)、前に説明したように土留めが板でしてあり土が一面ではくずれ落ち落葉がたまっている。道路側も下の部分は落葉が厚くたまっている。遊歩道であるから車は入れないし人通りもそれ程多くない(午前中だけしか開放されない貯水池周遊路)環境である。この様な状況下で各種ベニボタルが棲息して次々と季節毎に違った種があらわれ楽しませてくれるのだろうか。またこの土留めの板は一部腐り始めているが、この木片上では色々の甲虫たちが歩いているのに出会う。

イカリモンテントウダマシが来ていた。ワシバナヒメキクイゾウムシ, クロミジウムシダマシは多く見られるし、ベニモンカツオブシムシも割合いたし、デオキノコムシの1種とかフタモンツヤゴミムシダマシも来ていた。日本産で該当種が見当たらない様に思われるホソエンマムシの1種も来ていた。6月16日にはミスジヒシベニボタルは見る事が出来なかったかわりにカタアカホタルモドキ(この種はこの地では側溝の近くでちょこちょこお目にかゝる) 2exs. とオオマドボタル 1ex. がいた。さらに落葉上にネアカヒシベニボタルが6♂, 6♀がじーっとしている。この種は大林一夫氏が福岡県Tashiro産1♀, 愛知県Mt. Dando産♂をタイプに記載された種である(Mushi, Vol. 26, Pars. 6, P.19-20, 1954)。中根博士はその名著“Fauna Japonica: Lycidae, 1969”の中で美しい原色図で詳しい記載されると共に西宮産の記録をされている。本種の県下産の記録は必ずしも多くないが(本種の県下での記録は川西市笹部, 相生市三湊山, 養父郡氷の山と西宮市。烏原でも既に採集していた)。この様な状況で多くいることを知り得て喜んでいる。またミスジヒシベニボタルの方も県下では宍粟郡音水で採集したのと養父郡氷の山の記録がある位で可成り目につかない種のようなのである(こちらはKiesenwetterが“Japonia”を産地にEros属で記載された種である。Berliner Ent. Zeitschr. 18:254-255, 1874. 中根博士によると全国的に広く分布している種のようなのである)。

6月17日は終日雨だった。梅雨とは云え結構雨量も多く憂鬱な一日だった。18日は雨も止んで午前中は曇っていて道に水溜りが出来樹木も草花も水を多くふくんで余り状況が良くないと思

つゝ出掛けた。ところが雨あがりのおかげか土留めの周辺にはこのグループのものがいた。ミスジヒシベニボタルの1♂が落葉上にひっそりと、カタアカホタルモドキ 1ex., オオマドボタル 6exs. がそばの草上にいたし、クシヒゲベニボタル1♂もいた。ネアカヒシベニボタルは13♂, 10♀がいた。1組は交尾していた。全般に葉上, 落葉上にいたし飛翔していたのも数匹いた。上翅の短縮奇型のものが1♂, 2♀いたし, 1♀は上翅色彩が全般に黒味がかって僅かに先端部合線ぞいに赤味を有しているだけであった。6月19, 20日と再び雨, 雨で身動きが出来なかった。21日は曇空, 時々晴間が見られたので出掛けて見た。結構まだたくさん出ていた。9♂, 6♀採集。交尾中のものを2組見た。他のホタル類は少々離れた地点でオオマドボタル 2exs. とベニボタル1♀を採集。

その後若干用事があつたり体調をくずしたり, 雨等々でその場所への訪問の機会に間があいて6月28日久し振りに訪れた。雨で崖くずれとか道路が泥濘化している。ほとんどベニボタル類の姿を見なかった。わずかに1♂のネアカヒシベニボタルとオオマドボタル2exs., クロハナボタル1♀を採集しただけである。

この様にして限られた場所でもその状況がわかると野外ではなかなか得られないものが次から次へと多数現れる。採集, 調査のポイント探しの重要性を痛感させられる。

それ以後の同地点での状況は —

6月30日ネアカヒシベニボタル1♂, 1♀, オバボタル3exs., クロマドボタル 1ex., ベニボタル 1ex., クシヒゲベニボタル1♀を採集。7月1日はネアカヒシベニボタルは全く見なかったが久し振りにミスジヒシベニボタル1♂を見た。7月2日ネアカヒシベニボタル1♂, 1♀が採集出来た。(以上全部の調査時間帯は午前8時30分から9時30分間の1時間前後である)。

筆者が1964年に県下のベニボタルをまとめた時には18種が記録出来ただけであったが現在手許に集っている資料を見ると県下産ベニボタルは36種もある。そろそろ記録の発表をしなくてはならない様である。

(Aug. 1984)

## 宝塚市内におけるノコギリカメムシの採集記録

新 家 勝

ノコギリカメムシ *Megymenum gracilicorne* Dallsの分布については, 本誌9巻第1号に紹介されているが, 県下の産は余り報告されていないようである。筆者は宝塚市内で本種を採集しているので報告させていただく。

採集年月日 V. 26. 1984

採集場所 宝塚市切畑検見

採集時の状況 採集場所は, 宝塚市北部の田園地帯で, ナンキンノの苗の地際にいたものを採集した。